

松 山 大 学 論 集  
第 34 卷 第 1 号 抜 刷  
2 0 2 2 年 4 月 発 行

## コロナ禍における学生への影響に関する分析(1)

熊 谷 太 郎

# コロナ禍における学生への影響に関する分析(1)\*

熊 谷 太 郎†

## 1 はじめに

新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、経済活動は分断され、日本の社会経済にももれなく大きな影響をあたえている。社会の変化に目を向けると、3密回避のため、飲食店や屋内外問わず営業活動やイベントなどが大幅に制限され、大学生のアルバイトにも大きな影響が出た。実際に、一人暮らしの学生の貧困が問題となり、生活困難なため、大学を退学せざるを得ないケースも散見された。友だちに会ったり帰省の制限があったり、大幅な生活環境の変化による心への影響が懸念されている。

教育の場に目を向けると、2020年は全国的に学校の開始時期が通常よりも後ろ倒しされ、本学においても2020年度前期の授業開始時期は4月前半からではなく、5月後半からの開始であった。また、授業環境としては、対面授業は実施されず、すべて遠隔授業に変更され、学習環境の大幅な変更が余儀なくされた。学習環境の変化による学習への意欲への影響が懸念される。

内閣府のwell-beingに関する取り組みにおける、「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査（内閣府（2020年6月21日）」の調査によると、今回の新型コロナウイルス感染症拡大前に比べて、約75%の回答者が教育・学習に関する意識に変化があったと回答してい

---

\* 本論文は2020年度松山大学特別研究助成制度の成果論文である。なお、あり得べき誤謬はすべて筆者の責任である。

† 松山大学経済学部教授

る。意識変化の内訳として回答が多かったものは「教育・学習環境の重要性を意識するようになった。」「教育・学習自体の重要性を意識するようになった。」や「教育・学習における主体性、能動性を意識するようになった。」などが挙げられる。教育・学習環境の重要性に気がついたり、教育・学習そのものが重要であり、主体的、能動的な学習を意識するようになったり、コロナウイルス感染症拡大初期では前向きな意識変化があったことがわかる。大学生などはオンラインでの受講をした割合が75%程度と多いが、調査時点での学習時間の増減については、意識した学生とそうでない学生が二極化している可能性がある。

「第2回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査（内閣府（2020年12月24日））」では、学習時間の変化やオンライン授業の受講状況について、上述の第1回調査との比較が示されている。学習時間について、第1回調査時と比較すると増加したと答えている割合が上昇し、減少したという割合が低下している。学習意欲の変化はオンライン授業を受講した学生の方が高まった割合は多く、学習時間の変化も同様である<sup>1)</sup>。

「第3回新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査（内閣府（2021年6月4日））」でも同様に学習時間や学習意欲に関する変化が調査されている。学習意欲の変化については（2020年12月と2021年4-5月）、全国的に高まっている。東京都23区と地方圏を比較すると、東京都23区の方が意欲の高まりは相対的に大きい<sup>2)</sup>。調査対象期間であった2021年4月後半から5月前半は、新型コロナウイルス変異株が蔓延した時期と重なり、都市部ではオンライン授業に切り替わった大学も多いと推測され

---

1) ただし、オンライン授業の実施がただちに学習意欲を高め、そのため学習時間の上昇につながったと判断することはできない。オンライン授業は、ネット環境が整っていれば、どこにいても受講できるメリットは有る。しかし、集中しづらかったり、授業課題が多くなることで強制的に学習時間が増えたりすることがある（葛城（2021））。したがって、学習意欲が高まったからと言って、学習時間が増えたという因果関係があるかは不明である。  
2) 学習意欲の変化については、高校生と大学生等が含まれた結果である。

る。第2回調査の結果から、オンライン授業と学習意欲は正の相関があると推測できるため、東京都23区のほうが学習意欲が高いのはそのための可能性がある。学習時間については、増加傾向にあることに変化はなかった。

コロナ禍において、学生が感じている授業の困り感としては、「授業課題が多い。」、「受講生同士のつながりがない。」、「孤独感がある。」、「課題に対しての説明が不十分である。」などが挙げられる（葛城（2021））。また、入学してからオンライン授業を余儀なくされた1年生に焦点を当てると、「友達作り」、「学び合いの欠如」といった人間関係を形成できない難しさやパソコン操作に慣れていないため「遠隔授業でパソコンの操作」に苦慮するといった傾向が挙げられる（鈴木・菊池（2021））。

新型コロナウイルスは学生の学習面だけではなく生活面にも大きな影響を与えている。2020年に新型コロナウイルス感染症に係る緊急事態宣言を発令して以降、これまでの生活は一変している。マスクをしての生活を余儀なくされ、アルバイト先が飲食店や娯楽施設であれば休業や閉店のためアルバイトができず、生活困窮者に陥った学生も多くいると想定される。また、友人と自由に出かけることができず友人関係が希薄になったり、そもそも友人づくりも困難な状況に追い込まれたりした学生もいるだろう。孤独感にさいなまれ、精神的にきつかったことが推測できる（飯田・井上（2021））。総じて、新型コロナウイルスは学生のQOL (*Quality of Life*) を引き下げたことが考えられる（大西（2022））<sup>3)</sup> QOLの低下は学生に対する幸福感も引き下げたと考えられる。

上述のように新型コロナウイルス感染症の拡大は、学習意欲の向上や学習時間の増加といったように学生の学習面に大きな影響を与えた。しかし、学習意欲の向上に焦点を当てると、学習意欲の向上が内発的な動機づけに起因するのか外発的動機づけによるものなのかは不明である。また、学習意欲向上の源泉がどこにあるかはまったく不明である。さらに、QOLの低下は学生自身の幸

---

3) 大西（2022）の分析対象は小・中・高校生であるが、葛城（2021）や飯田・井上（2021）にもあるように、健康面や精神面は大学生も同様に点数は低くなることが予想される。

幸福感も引き下げているものと考えられる。どの程度引き下がったのかは個別に異なると思われるが、低下度合いは主観的に判断されることであろう。

以上より、新型コロナウイルスによる社会経済の変化は、学生の学習環境や生活環境に大きな影響を与えたことがうかがえる。具体的にどのような影響を与えたかを測るため、学生の自信に対する有能さの感覚（有能感）や自己決定している感覚（自己決定感）、学習に対する包括的な動機づけ（内発的-外発的動機づけ測定尺度）、そして主観的な心理的健康（主観的幸福感）がどのように影響されたかを分析する。したがって、QOLの低下が引き起こす幸福感の低下については、個人の主観的判断、心理的側面を重視するため、主観的幸福感尺度を使用する。

新型コロナウイルスが蔓延する以前は対面での授業が行われていたが、蔓延後、特に2020年度は原則遠隔授業のみが実施された。対面授業時におけるデータがないため、遠隔授業との比較はできない。しかし、前期と後期で同じアンケートを実施しているため、遠隔授業が学生にどのような影響を与えたのかについては分析可能である。学習に対する動機づけや主観的幸福感を中心として、学生にどのような影響があったのかを分析することが主な狙いである。

本論文の構成は以下の通りである。第2節では、本論文で使用する尺度と調査対象となった学生の特徴を述べる。第3節では、調査項目の得点から見る学生の特徴を捉える。特に、有能感尺度と自己決定感尺度については先行研究による下位尺度が設定されていないため、改めて因子分析を行い、因子を特徴づける。第4節では、具体的に遠隔授業による学習意欲や主観的幸福感を分析するために、属性ごとにどのような尺度・因子に有意な差が見られ、その原因が何であるかを考察し、第5節でまとめる。

## 2 使用尺度と学生の属性

### 2.1 使用尺度

桜井（1997）は、内発的な学習意欲を支えている『内発的学習意欲』のみ

なもと』には3つの要素があると考えた。その3つの要素とは、有能感 (*sense of competence*), 自己決定感 (*sense of self-determination*), そして他者受容感 (*sense of acceptance by significant others*) である。他者受容感のみ対人関係の要素となっており、内発的な学習意欲の源泉として有能感や自己決定感よりも遅く認められた要素である (Deci and Ryan (1985))。本論文では、桜井 (1997) にあるように、有能感と自己決定感の2つの源に支えられ学習行動につながると考え分析をすすめる。

質問紙は、松山大学経済学部における筆者の担当授業内にて、その場で回答をしてもらった<sup>4)</sup>。質問紙における調査項目は、有能感と自己決定感、内発的－外発的動機づけ測定尺度、そして主観的幸福感尺度である。以下は、それぞれの尺度に対する説明である。

1. 有能感尺度・自己決定感尺度：桜井 (1993) によって開発された。有能感とは「自分は勉強ができる。」や「頑張れば勉強ができる」といった有能さの感覚で、自己効力感 (*sense of self-efficacy*) に近い。自己決定感は「自分のことは自分で決める」という自己決定している感覚をのことを指す。回答形式は「まったくあてはまらない」(1点) から「非常にあてはまる」(6点) までの6件法を採用しており、得点範囲は8点～48点である。また、有能感尺度については1つ、自己決定感尺度については4つの逆転項目が含まれている。
2. 内発的－外発的動機づけ測定尺度：桜井・高野 (1985) が作成した、内発的動機づけに関する包括的な測定尺度である。本測定尺度の特徴として、

---

4) 筆者の担当講義科目は、ミクロ経済学Ⅲ、公共経済学 (以上、前期科目)、ミクロ経済学Ⅱ、経済政策基礎論 (以上、後期科目) である。また、担当演習科目は一般基礎演習 (1年生・通年)、経済基礎演習 (2年生・前期)、経済専門演習Ⅰ (2年生・後期)、経済専門演習Ⅱ (3年生・通年)、そして経済専門演習Ⅲ (4年生・通年) である。2020年度授業は新型コロナウイルスの影響で、すべて Zoom を利用してオンラインで授業を実施した。授業内で回答を依頼し、回答は本学の授業システムの1つである Moodle 上で行った。

(1)内発的動機づけに関する多様な概念を取り上げること、(2)教室での学習場面だけでなく、家庭での学習場面も含み、知的活動場面全体の項目を含んでいること、(3)適用範囲は小学2年生から中学1年生までの児童・生徒であること、が挙げられる。本論文の調査対象者は大学生であるため、桜井・高野(1985)の質問内容を損なわない範囲で大学生向けに用語の変更を行った杉山・菅(2010)の質問項目を採用した。回答形式は2つの選択肢(内発的か外発的に動機づけられた行動あるいは意識)から該当すると思われる方を調査対象者に選択してもらうという二者択一方式である。内発的な動機づけ傾向を示す選択肢を選択した場合は1点、外発的な動機づけ傾向を示す選択肢を選択した場合は0点とし、得点化した。得点範囲は0点から30点である。

桜井・高野(1985)では、6つの下位尺度が構成されるように開発している。6つの下位尺度とは、(1)挑戦(*challenge*:難しい課題に取り組もうとする傾向)、(2)知的好奇心(*curiosity*:興味や好奇心から様々な知的課題に取り組む傾向)、(3)達成(*mastery*:教師や友人に頼ることなく自分の力で問題に取り組もうとする傾向)、(4)認知された因果律の所在(*perceived locus of causality*:自分の学習行動を自分で引き起こしていると認知するか、保護者や教師などにより引き起こされていると認知するか)、(5)内生的-外生的帰属(*endogenous-exogenous attribution*:自分の学習行動に対して、その学習行動それ自体が目的であると考えるか、それとも別の目的がありその学習行動を取っていると考えるか)、(6)楽しさ(*enjoyment*:知的活動をしているときに感じる楽しいという感情)である。

3. 主観的幸福感尺度:伊藤他(2003)によって大学生を対象に作成された尺度を採用した。伊藤他(2003)では、信頼性と妥当性が検討されている。主観的な心理的健康を測定する15項目から構成されており、「まったくそう思わない(1点)から非常にそう思う(4点)」の4件法で質問した。得点範囲は15点から60点である。

主観的幸福感尺度では、5つの下位尺度が確認されている：(1)満足感(人生に対する前向きな気持ち)、(2)自信、(3)達成感、(4)人生に対する絶望感、(5)至福感。

## 2.2 学生の属性

本調査における学生の特性を概観する。表1は本調査における学生の概要である。筆者は経済学部専門科目の担当が多いため、ほぼすべて経済学部の学生である。そのため、1年生の数が少ない。女性は全体の約3割ほどである。経済学部の男女比率は例年約7：3であるため、おおむね経済学部の例年の男女比となっている。

部活動を経験してきた学生が多く、9割近い学生が、中学校・高校時代に部活動を経験している。また、3割以上が10年以上経験しており、大学に入学した後も部活動に励んでいる学生も多い。

大学の志望順位について、半数以上が第1志望ではないことがわかるが、おおむね志望していた学部に入學できていることがわかる。このことから、経済学部志望であるが、大学は松山大学以外を第1志望にしていた学生が多いことがわかる。

表1 学生の概要

性 別	男 性	317	学 年	1 年生	34
		女 性		126	
部活経験	スポーツ系	359	大学志望順位	3 年生	152
	文化会系	70		4 年生以上	78
	部活経験無し	14		第1志望	204
部活動経験年数	0 - 3 年	46		第2志望	130
	4 - 6 年	152	第3志望以下	110	
	7 - 9 年	108	学部志望順位	第1志望	378
	10年以上	138		第2志望	53
				第3志望以下	11



### 3 調査項目得点から見る学生の特徴

内発的-外発的動機づけ測定尺度と主観的幸福感尺度については、それぞれ桜井・高野(1985)と伊藤他(2003)における分析の通りの下位尺度を用いる。有能感尺度と自己決定感尺度については、それぞれ因子分析を行い、何が下位尺度であるのかを探索する。

表2は有能感尺度の因子分析の結果である。有能感尺度について、初期の固有値を見ると、第1因子は4.09、第2因子は.982、そして第3因子は.785であり、第2因子と第3因子の差が小さくなっている。このことから、有能感は2因子構造と仮定し、主因子法・プロマックス回転による2回目の因子分析を行った。「なるべく簡単にできる仕事をしている」の負荷量が-.314とやや低かったため、この質問項目を削除し、3回目の因子分析を行った。各項目の負荷量は表2のとおりであった。相互の因子相関が.813であり、因子間に相関があることが確認された。

第1因子は、「有能な人間である」や「現在、所属する研究室では優秀な方である。」などの項目の負荷量が高いため、基礎能力因子と名付けた。また、第2因子は「やりかけたことは、うまくやり遂げている」や「周りの人ができないことでも、うまくやっている」などの項目の負荷量が高いため、課題解決

表2 有能感情尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後のパターン行列)

	因子 I	因子 II
1. 有能な人間である。	.811	-.150
8. 現在、所属する研究室では優秀な方である。	.780	.048
5. 他の人には難しいようなパズルや問題を簡単に解く方である。	.371	.154
6. やりかけたことは、うまくやり遂げている。	-.193	.802
7. 周りの人ができないことでも、うまくやっている。	.257	.600
3. 物事は他の人より上手にしている。	.281	.578
2. 難しい仕事(課題)でもうまくやり遂げていて、物事は他の人より上手にしている。	.366	.519
	因子間相関	.813

表3 自己決定感尺度の因子分析結果（プロマックス回転後のパターン行列）

	因子 I	因子 II
3. 自分の思い通りに行動している。	.820	-.124
5. なにかやりたいときには、他人に頼らず自分の判断で決めている。	.804	-.046
1. 自分の生き方は自分で決めている。	.788	.018
7. 他人の考えにこだわらず、自分の考えどおりにしている。	.649	.007
4. 自分に関わる大切なことほど、他人に決めてもらうことが多い。	.108	.769
2. 自分のすることでも、他人に決めてもらうことが多い。	.115	.737
6. 自分がやりたいと思うことでも、他人からやめろと言われたら、やめている。	-.067	.532
8. グループ活動で何をするか決めるときは、誰か他の人の意見に従っている。	-.188	.478
	因子間相関	.544

能力因子と名付けた。

Cronbach のアルファを用いて  $\alpha$  係数を算出したところ、第1因子の  $\alpha$  係数は .698、第2因子の  $\alpha$  係数は .853 であり、十分な値が得られた。

表3は自己決定感尺度の因子分析の結果である。自己決定感尺度について、初期の固有値を見ると、第1因子は3.51、第2因子は1.46、そして第3因子は.829であり、第2因子と第3因子の差が小さくなっている。このことから、自己決定感は2因子構造と仮定し、主因子法・プロマックス回転による2回目の因子分析を行った。各項目の負荷量は表3のとおりであった。相互の因子相関が.544であり、因子間に相関があることが確認された。

第1因子は、「自分の思い通りに行動している」や「なにかやりたいときには、他人に頼らず自分の判断で決めている」などの項目の負荷量が高いため、自己判断因子と名付けた。また、第2因子は「自分に関わる大切なことほど、他人に決めてもらうことが多い」や「自分のすることでも、他人に決めてもらうことが多い」などの項目の負荷量が高いため、他者依存因子と名付けた。

表4は各尺度・因子の記述統計である<sup>5)</sup>。有能感の項目は先の因子分析の結

5) 逆転項目は点数の入れ替え処理を行っている。

表4 各尺度・因子の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	中央値
<b>有能感</b>	7	42	21.81	6.347	22
基礎能力	3	18	8.5	2.893	9
課題解決能力	4	24	13.31	5.963	14
<b>自己決定感</b>	11	48	31.52	5.964	31
自己判断	4	24	16.06	3.779	16
他者依存	4	24	15.47	3.333	15
<b>内発的-外発的動機づけ尺度</b>	1	30	16.86	6.052	17
知的好奇心	0	5	3.61	1.368	4
認知された因果律の所在	0	5	3.03	1.588	3
達成	0	5	3.09	1.895	2
内生的-外生的帰属	0	5	2.35	1.472	2
挑戦	0	5	1.82	1.801	1
楽しさ	0	5	2.95	1.335	3
<b>主観的幸福感</b>	15	60	38.87	7.807	39
満足感	3	12	8.63	2.224	9
自信	3	12	7.84	1.976	7
達成感	3	12	7.36	1.976	7
人生に対する絶望感	3	12	7.76	1.939	8
至福感	3	12	7.39	1.916	7

果、項目を1つ削除しているため、得点範囲は7点から42点である。おおむね、どの尺度および因子も平均値は最大値の半分の値を超えている。しかし、基礎能力や挑戦、内生的-外生的帰属の平均値は最大値の半分を下回っている。新型コロナウイルスの影響により、何らかの理由で学力的な能力に自信を失い、挑戦する気持ちが小さくなっている可能性がある。また、学習については、内発的な動機よりも外発的な動機のほうが強い傾向がある。

#### 4 新型コロナウイルスにおける授業形態の変化による影響

本節では、新型コロナウイルスによる授業形態の変化が上述の項目や因子に

どのような影響を与えたのかを分析する。特に、遠隔授業当初の前期と遠隔授業に慣れてきた後期において、学生の属性ごとに、学生にどのような変化が生じたのかを中心に分析する。

#### 4.1 性差に関する分析

本小節では、性差に関する分析を行う。各尺度や因子について、男性と女性で持ち合わせている思想や特性から差があることは十分予測される。表5は前期と後期において、性差が有意に観測された尺度・因子である。前期と後期を比較すると、後期の方が、性差が有意だった尺度・因子が多いが、前後期共通して有意な性差のあった因子は挑戦のみである。前期について、男性の方が有意に点数の高かった因子は、挑戦と内生的-外生的帰属であり、女性の方が有意に点数の高かった因子は、楽しさである。主観的幸福感について、性差は有意ではなかった。

基礎能力因子は質問項目から学力が高いことを想定している因子である。男

表5 性差のあった尺度・因子の平均値

	前 期			後 期		
	男性	女性	t 値	男性	女性	t 値
<b>有能感</b>				25.76	23.34	2.996***
基礎能力				8.98	7.36	4.35†
課題解決能力				13.69	12.66	1.987**
<b>自己決定感</b>				32.2	29.57	3.279†
自己判断				16.44	15.3	2.339**
他者依存				15.75	14.26	3.202***
<b>内発的-外発的動機づけ尺度</b>						
挑 戦	2.03	1.38	2.346**	1.97	1.37	2.718***
内生的-外生的帰属	2.53	2.04	2.346**			
楽しさ	2.86	3.34	2.103**			

\*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$ , † :  $p < .001$

表6 男女別小テスト受験割合および点数の平均（前期）

	男性		女性		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
小テスト受験割合	80%	.2565	93%	.1174	2.824***
小テスト得点率	23.81	11.7553	29.88	8.9498	2.292**
合計得点率	51.95	18.3713	61.42	16.4183	1.986**

\*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$

性の方が高い傾向にあるが、前期授業における小テスト受験割合、小テストの得点率、および小テストと期末テストの合計得点率について、いずれも女性の方が有意に高い（表6）<sup>6)</sup>。後期については、受講者は異なるものの、期末試験の得点率（ $t = 1.516$ ,  $df = 197$ ,  $p < 0.1$ ）のみ男性が高い傾向にあった<sup>7)</sup>。得点差については、1.98点に縮小している。それにもかかわらず、前期については男性と女性の基礎能力因子に有意な差は見られず、後期については基礎能力の平均点が前期よりも拡大している。これらの点から、基礎能力について、男性が過大評価しているか、女性が過小評価しているかのどちらかの可能性が高い。授業全体が遠隔授業に切り替わったことで、演習科目も遠隔で行われていた。一般的には、講義科目よりも演習科目のほうが課題解決能力を磨く機会が多いが、演習科目が対面で行われないことで、女性がより過小評価をしているかもしれない。その結果として、有能感尺度について男女間で有意な差が見られたのだろう。

自己決定感について、後期になると尺度・因子ともに男性の方が女性よりも有意に平均が高くなっている。大学で友人に会えなかったり、外出に規制がか

6) 小テストと期末試験いずれも成績の50%の比重となっている。そのため、実際の点数ではなく、得点率となっている。

7) 前期と後期では、一部重なる学生がいるものの授業の受講者が異なる。そのため、前期と後期で有意な差のある尺度・因子が異なるという指摘があるかもしれない。しかし、前期と後期の学生では失望感のみが有意差がある傾向にあるという結果となった（ $t = 1.760$ ,  $df = 442$ ,  $p < .10$ ）。したがって、前期と後期の学生に大きな差があるために、有意な差のある尺度・因子が生じているわけではない。以下すべての分析についても同様である。

かったりすると自然に孤独感が増すことも考えられる。男性の場合は、同性の親友や友人に自己開示することで孤独感が低くなり、女性は同性の親友に自己開示している人ほど孤独感が低くなる（竹内（2010））。孤独感を避けるために同性とのコミュニケーションが増えた可能性を考えると、自己決定感尺度・因子に有意な差が見られることは妥当であるかもしれない。男性と女性のコミュニケーションのとり方には違いがあり、男性の会話はあくまでも情報のやり取り、女性は心のやり取りをしている（タネン（1992））。また、女性は男性よりも共感性が有意に高く（葉山他（2008）、桃木・中谷（2016））、対象物のメカニズムやシステムを分析、その動きを規定する基本的な規則性を解明する働きを指すシステム化については男性の方が有意に高く（桃木・中谷（2016））、コミュニケーションも何かを解決に向けてのものになりやすい。そのため、コロナ禍で制限されたコミュニケーションが長引くことで、男性の方が自己決定感尺度・因子が有意に高くなったと予測される。

挑戦について、前期（ $t = 2.346$ ,  $df = 119.575$ ,  $p < .05$ ）は男性の方が有意に高かったが、後期に（ $t = 2.718$ ,  $df = 154.777$ ,  $p < .01$ ）についても有意に高い。コロナ禍のような状況でも、男性の方がなにかに挑戦しようという気持ちが強いかもしれない。しかし、男性の平均が前期よりも低下しており、その気持ちは少し薄まっている可能性がある。大学での授業が全て遠隔となり、また外出も制限されている中で、学生の挑戦しようという気持ちを低下させている可能性がある。

前期には差のあった内生的－外生的帰属や楽しさについて、後期には性差がなくなっていた。杉山・菅（2010）によると、内発的－外発的動機づけ尺度における知的好奇心と楽しさについて、男性よりも女性の方が有意に高かった。本論文においても、楽しさは女性の方が有意に高かった。しかし、コロナウイルスの蔓延により遠隔授業を強いられたことにより、学習に対する楽しさが薄れ、後期には有意な差がなくなった可能性がある。

## 4.2 学年差に関する分析

本小節では、学年ごとに各尺度・因子に対してどのような差があるのかを分析する。1年生は入学してから大学に一度も来ることなく、遠隔授業を受けており対面の授業経験がない。上級生は対面授業の経験を経て遠隔授業に至っている。学年ごとに、対面授業をどの程度経験してきているのか、また専門科目が本格的に始まったり、就職活動を控えたりなどの状況で感じ方は変わってくるのが予測される。

表7は前期と後期において、1要因の分散分析を行った結果、学年間の差が有意であった尺度・因子である。前期には学年差が有意であった尺度は認知された因果律の所在 ( $F(3, 148) = 3.675, p < .05$ ) のみであったが、後期になると学年差が有意な(傾向にある)尺度・因子は自己決定感 ( $F(3, 288) = 3.635, p < .05$ )、自己判断 ( $F(3, 288) = 2.238, p < .10$ )、他者依存 ( $F(3, 288) = 4.352, p < .01$ )、認知された因果律の所在 ( $F(3, 288) = 6.804, p < .001$ )、内生的-外生的帰属 ( $F(3, 288) = 2.63, p < .10$ )、そして楽しさ ( $F(3, 288) = 2.368, p < .10$ ) の6つに増大している。

前期における認知された因果律の所在について、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、2年生、3年生 > 4年生\*\*だった。

後期において有意な差が確認された尺度・因子についてTukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「自己決定感：2年生 < 3年生\*\*\*」、「自己判断：2年生 < 3年生\*」、「他者依存：1年生\*、2年生\*\* < 3年生」、「認知された因果律の所在：1年生、3年生 > 4年生以上\*、2年生 > 4年生以上<sup>†</sup>」、そして「楽しさ：1年生 > 4年生以上\*」であった。

内発的-外発的動機づけ尺度に関して、認知された因果律の所在は前期・後期ともに4年生以上の平均が低かった。特に、後期になると4年生以上は1年生よりも平均が低い結果となっている。4年生以上は、卒業に向けて卒業論文の執筆に取り掛かっている時期であり、特に後期はよりその時期も迫っている。また、卒業に必要な単位を修得しなければならず、単位修得に対するプレッ

表7 学年差のあった尺度・因子

従属変数	変動因	前 期				後 期			
		平方和	df	平均平方	F 値	平方和	df	平均平方	F 値
自己決定感	学年間					370.436	3	123.479	3.635**
	学年内					9782.509	288	33.967	
	合 計					10152.945	291		
自己判断	学年間					89.458	3	29.819	2.238*
	学年内					3837.063	288	13.323	
	合 計					3926.521	291		
他者依存	学年間					135.509	3	45.17	4.352***
	学年内					2989.052	288	10.379	
	合 計					3124.562	291		
認知された 因果律の所在	学年間	28.16	3	9.387	3.675**	46.883	3	15.628	6.804†
	学年内	378.044	148	1.599		661.459	288	2.297	
	合 計	406.204	151			708.342	291		
内生的- 外生的帰属	学年間					16.532	3	5.511	2.63*
	学年内					603.533	288	2.096	
	合 計					620.065	291		
楽しさ	学年間					12.566	3	4.189	2.368*
	学年内					509.461	288	1.769	
	合 計					522.027	291		

\* :  $p < .10$ , \*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$ , † :  $p < .001$

シャーは他学年よりも大きいと考えられる。そのため、自ら学習行動を引き起こしているというよりも、学習行動を引き起こされていると感じている可能性がある。上述の事情から、学習自体が目的であるというよりも、卒業のために学習をしている気持ちが強くなり、そのための学習行動であるとするなら、知的活動をしているときに楽しいという感情は生まれづらいだろう。

自己決定感については、2年生よりも3年生のほうが有意に高く、特に2年生との差は他者依存にあると考えられる。経済学部の3年生は12月初旬にゼミ大会を控えている。ゼミ大会は3年生にとって一大イベントであり、このた



めに経済専門演習では約1年かけて論文作成や論文発表の準備を進めてきている。また、論文の内容や発表が優秀であれば、最優秀賞や優秀賞といった賞を獲得することができる。これらの賞の獲得を目指し、論文作成や発表の準備に励んでいる学生は多く、ゼミの選択にも影響することが考えられる。そのため、3年生の自己決定感や他者依存の低さが際立ったと考えられる<sup>8)</sup>。4年生との差が有意ではない原因としては、卒業に向けて必要単位の習得に向けて勉強したり、卒業論文を執筆したり、やるしかない状況にあるためだと考えられる。

### 4.3 松山大学に対する志望順位の差に関する分析

本小節では、松山大学の志望順位について、各尺度・因子に対してどのような差があるのかを分析する。松山大学が第1志望の学生や第2志望の学生と第3志望以下の学生では、学生生活の満足度や自らの能力に対する評価、学習に対する態度など異なることは十分予想される。

表8と表9は前期と後期において、1要因の分散分析を行った結果、松山大学の志望順位間の差が有意であった尺度・因子である。

前期について、差が有意だったあるいは有意な傾向にあった尺度・因子は、有能感 ( $F(2, 149) = 4.686, p < .01$ )、基礎能力 ( $F(2, 149) = 4.951, p < .01$ )、課題解決能力 ( $F(2, 149) = 2.624, p < .10$ )、内発的-外発的動機づけ ( $F(2, 149) = 4.998, p < .01$ )、知的好奇心 ( $F(2, 149) = 5.574, p < .01$ )、内生的-外生的帰属 ( $F(2, 149) = 5.179, p < .01$ )、挑戦 ( $F(2, 149) = 4.475, p < .05$ )、そして達成感 ( $F(2, 149), p < .10$ ) の8項目である。

TuckyのHSD法による多重比較を行ったところ、「有能感：第3志望以下>第1志望\*\*\*」、「基礎能力：第3志望以下>第1志望\*\*\*」、「課題解決能力：第3志望以下>第1志望\*」、「内発的-外発的動機づけ：第3志望以下>第1志

8) 他者依存因子はすべて逆転項目である。分析の際は、点数を逆転させているため、他者依存因子の平均が高ければ、他者依存傾向は低いと考える。その他、すべての逆転項目についても同様である。

望\*\*，第2志望\*\*\*]，「知的好奇心：第3志望以下>第1志望，第2志望\*\*\*]，「内生的-外生的帰属：第3志望以下>第1志望，第2志望\*\*]，「挑戦：第3志望以下>第1志望\*\*]，そして「達成感：第1志望>第3志望以下\*]であった。

有能感や基礎能力については，第3志望以下の学生は本来であれば松山大学ではなく，（偏差値の意味で）よりレベルの高い大学を志望していたことが考えられる。したがって，松山大学が第1志望の学生よりも有能感や基礎能力が高いと考えていると推測できる。内発的-外発的動機づけも同様である。大学の授業のみならず，自主的な学習を含んだ知的活動場面全体を測る尺度であり，なにか報酬を得られるからというよりも，目的を持って学習に取り組むことが予想される。また，志望大学に入学できなかった学生は，就職や大学進学等の次のステップでは自らが志望している進路を強く目指すと考えているかもしれない。それゆえに，知的好奇心や内生的-外生的帰属，挑戦は必然的に第3志望以下の学生の方が必然的に高くなるのであろう。一方で，達成感について，志望大学に入学できなかったため第1志望の学生の方が高い傾向にあると考えられる。

後期について，差が有意だったあるいは有意な傾向にあった尺度・因子は内発的-外発的動機づけ ( $F(2, 289) = 2.408, p < .10$ )，認知された因果律の所在 ( $F(2, 289) = 2.339, p < .10$ )，達成 ( $F(2, 289) = 4.335, p < .05$ )，挑戦 ( $F(2, 289) = 4.569, p < .05$ )，主観的幸福感 ( $F(2, 289) = 3.705, p < .05$ )，満足感 ( $F(2, 289) = 3.036, p < .05$ )，達成感 ( $F(2, 289) = 3.039, p < .05$ ) の8項目である。

Tucky の HSD 法による多重比較を行ったところ，「内発的-外発的動機づけ：第3志望以下>第1志望\*]，「達成：第3志望以下>第1志望\*\*]，「挑戦：第3志望以下>第1志望\*\*\*]，「主観的幸福感：第1志望>第2志望\*，第3志望以下\*\*]，「満足感：第1志望>第3志望以下\*]，そして「達成感：第1志望>第3志望以下\*]であった。学習に関する達成は第3志望以下の学生が第1

表8 大学志望の順位により差のあった尺度・因子(1)

従属変数	変動因	前 期				後 期			
		平方和	df	平均平方	F 値	平方和	df	平均平方	F 値
有能感	順位間	371.291	2	185.645	4.686***				
	順位内	5903.176	149	39.619					
	合 計	6274.67	151						
基礎能力	順位間	81.03	2	40.515	4.951***				
	順位内		149	39.511					
	合 計	6223.974	151						
課題解決能力	順位間	87.54	2	43.77	2.624*				
	順位内	2485.17	149	16.679					
	合 計	2572.711	151						
内発的-外発的 動機づけ	順位間	339.035	2	169.518	4.998***	177.503	2	88.751	2.408*
	順位内	5053.906	149	33.919		10649.58	289	36.85	
	合 計	5392.941	151			10827.082	291		
知的好奇心	順位間	16.837	2	8.419	5.574***				
	順位内	225.051	149	1.51					
	合 計	241.888	151						
認知された 因果律の所在	順位間					11.284	2	5.642	2.339*
	順位内					697.059	289	2.412	
	合 計					708.342	291		
達 成	順位間					31.073	2	15.536	4.335**
	順位内					1035.76	289	3.584	
	合 計					1066.832	291		
内生的- 外生的帰属	順位間	22.058	2	11.029	5.179***				
	順位内	317.31	149	2.13					
	合 計	339.368	151						
挑 戦	順位間	26.341	2	13.17	4.475**	29.796	2	14.898	4.569***
	順位内	438.501	149	2.943		942.297	289	3.261	
	合 計	464.842	151			972.092	291		

\* :  $p < .10$ , \*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$ , † :  $p < .001$

表9 大学志望の順位により差のあった尺度・因子(2)

従属変数	変動因	前 期				後 期			
		平方和	df	平均平方	F 値	平方和	df	平均平方	F 値
主観的幸福感	順位間					438.267	2	219.133	3.705**
	順位内					17091.497	289	59.140	
	合 計					17529.764	291		
満足感	順位間					28.338	2	14.169	3.036**
	順位内					1348.539	289	4.666	
	合 計					1376.877	291		
達成感	順位間	24.391	2	12.195	2.916*	22.104	2	11.052	3.039**
	順位内	623.076	149	4.182		1051.143	289	3.367	
	合 計	647.476	151			1073.247	291		

\* :  $p < .10$ , \*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$ , † :  $p < .001$

志望の学生よりも有意に高い結果となったが、主観的な健康的心理を測る主観的幸福感の因子の一つである達成感については、第1志望の学生が第3志望以下の学生よりも有意に高い傾向にあった。満足感について、第1志望の学生が第3志望以下の学生よりも有意に高かったことと合わせて考えると、新型コロナウイルス蔓延時でも志望通りの大学に入学できなかった学生は学業面でしっかりと研鑽を積み上げ達成感があった、一方で心理的には第1志望の大学に合格した学生は心理的な健康を保っており、結果として主観的な幸福度も高くなっているのではないかと考えられる。

総じて言えることは、松山大学が第3志望以下で不本意に入学した学生は、やる気を失うというよりも学業面では内発的に努力を積み上げ達成したと感じ取っており、第1志望で入学してきた学生は入学そのものから満足感や達成感を得ており、心理的な健康を保ち続けているのではないかと推察される。

#### 4.4 部活動経験年数の差に関する分析

本小節では、部活動経験年数の差によって各尺度・因子にどのような差異が

あるのかを分析する。部活動を経験している学生の数が多いことは表1より明らかであるが、経験年数にはばらつきがある。中学校のみ経験している学生や中学校と高校で経験している学生、また小学校から現在まで部活動を続けている学生まで多様である。部活動を長期間継続している学生と短期間でやめてしまう学生の間では、各尺度・因子に違いが生じることが予測される<sup>9)</sup>

表10, 表11 および表12 部活動の経験年数により差のあった尺度・因子を表している。特徴としては、以下のことが挙げられる。(1)前期よりも後期のほうが経験年数により有意な差が見られる, (2)有能感については、前期も後期も経験年数による差は有意である, (3)自己決定感, 内発的-外発的動機づけ尺度, そして主観的幸福感については、いずれも後期のほうが経験年数による有意差が大きくなっている。

まずは有能感についてから考察しよう。前期について、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「有能感：0-3年<4-6年, 10年以上\*\*」, 「基礎能力：0-3年<4-6年\*\*, 10年以上\*\*\*」, そして「課題解決能力：0-3年<10年以上\*」だった。有能感については部活動経験が短期である学生に対して、長期的に経験している学生のほうが有意に高かった<sup>10)</sup>。部活動経験者のほうが有能感が有意に高い理由は、基礎能力の高さに起因する。課題解決能力については部活動経験短期者と長期経験者の間の差が有意な傾向にあっ

---

9) 実際に、部活動について、体育学の分野で研究が盛んに行われている。運動経験・スポーツ経験が長いほど社会に対する意欲や行動状態を表す社会的健康が高まったり、個々人が人生における様々な出来事をどのように捉え対処しようとしているのかという指向性を測る首尾一貫感覚が高まったりする(園部他(2012))。また、スポーツ経験を通じて、将来に希望を持ち、現在の生活に充実感を持ち、過去を受容するという感覚である時間的展望の獲得を促したり(葛西他(2010))、日常場面に必要とされるライフスキル(上野・中込(1998))や目標設定スキル(上野(2006))の獲得につながっており、ライフスキルの獲得が時間的展望の獲得にもつながることが明らかにされている(上野(2007))。

10) ただし、7-9年の経験がある学生との差がないことを考えると、単純に長さだけでは測定が難しいかもしれない。4-6年の学生が中学校と高校での部活動経験があり、0-3年の学生は中学校だけで部活動をやめたということであるとしよう。中学校までの部活と高校での部活の強度に差があるとすると、能力に差があることは理解できるが、今回のアンケート調査からはそのことは分析することが難しい。どの年代で部活動経験があるかを問うアンケート作成は今後の課題である。

表 10 部活動の経験年数により差のあった尺度・因子(1)

従属変数	変動因	前 期				後 期			
		平方和	df	平均平方	F 値	平方和	df	平均平方	F 値
有能感	年数間	436.663	3	145.554	3.722**	437.92	3	145.973	3.766**
	年数内					11161.957	288	38.757	
	合 計	6223.974	151			11599.877	291		
基礎能力	年数間	100.493	3	33.498	4.132***	55.808	3	18.603	2.282*
	年数内	1181.374	147	8.037		2348.203	288	8.153	
	合 計	1300.316	151			2404.01	291		
課題解決能力	年数間	121.315	3	40.438	2.441*	224.837	3	74.946	5.139***
	年数内	2451.396	148	16.563		4200.352	288	14.585	
	合 計	2572.711	151			4425.188	291		
自己決定感	年数間					444.395	3	148.132	4.394***
	年数内					9708.551	288	33.71	
	合 計					10152.945	291		
自己判断	年数間	103.267	3	34.422	2.222*	137.868	3	45.956	3.493**
	年数内	2292.253	148	15.488		3788.653	288	13.155	
	合 計	2395.52	151			3926.521	291		
他者依存	年数間					88.495	3	29.498	2.798**
	年数内					3035.132	287	10.575	
	合 計					3124.562	291		

\* :  $p < .10$ , \*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$

たに過ぎない。

後期について Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、「有能感：0 - 3年 < 7 - 9年・10年以上\*\*」, 「基礎能力：0 - 3年 < 7 - 9年\*」, そして「課題解決能力：0 - 3年 < 7 - 9年\*, 10年以上\*\* ; 4 - 6年 < 10年以上\*\*」だった。前期と比較すると、やはり有能感に有意な差があるが、質的に異なる。後期の場合は、短期の部活動経験者と長期の部活動経験者に差があり、かつそれは課題解決能力の差によるものが大きい。また、部活動経験が0 - 3

年と4-6年の学生の差は有意とは言えなくなった。

新型コロナウイルスの影響により遠隔授業が長期的に続くと、グループによる課題解決型の授業を実施することは比較的困難であると考えられる。しかし、部活動経験が長かったり、大学でも部活動を続けていたりすると、部活動内でコロナ対策などの課題解決に直面する可能性がある。そのため、後期では部活動経験が長期になるほど課題解決能力が高いと感じ、有能感に有意な差が見られたと考えられる<sup>11)</sup>

自己決定感について、TukeyのHSD法による多重比較を行った結果、「自己判断：0-3年<10年以上\*」だったが、その差は非常に弱い。しかし、後期になるとその差は一変する。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「自己決定感：0-3年<4-6年・10年以上\*\*、7-9年\*\*\*」, 「自己判断：0-3年<7-9年\*\*\*・10年以上\*\*」, そして「他者依存：0-3年<7-9年\*\*」だった。有能感と同様、部活動経験が短期の学生よりも長期の学生の方が自己決定感が有意に高かった。部活動を長期的に経験していると、自分で何かを決める状況に多く直面すると思われる。このコロナ禍でも、部活動を制限されている状況であり、その中で何ができるかを自ら考え、決定する状況が多々あったと推測される。自分で判断し、他者に相談はすることはあっても、大切な決定はすべて自身で行うという習慣が身についているのかもしれない。

内発的-外発的動機づけについて、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、後期に有意差のある尺度・因子が増えている：「内発的-外発的動機づけ：0-3年\*\*、4-6年\* < 7-9年」, 「認知された因果律の所在：0-3年<7-9年\*\*\*・10年以上\*\*；4-6年<7-9年\*」, そして「内生的-外発的帰属：0-3年\*\*\*、4-6年\* < 7-9年」だった。自己決定感は部活動経験の長い学生が短い学生よりも有意に高かったが、学習状況にも良い影響が出ていることが考えられる。認知された因果律の所在が高いということは、

---

11) 部活動経験による研究の変遷やまとめについては今宿他(2019)が詳しいが、課題解決能力が高まることも触れられている。

表 11 部活動の経験年数により差のあった尺度・因子(2)

従属変数	変動因	前 期				後 期			
		平方和	df	平均平方	F 値	平方和	df	平均平方	F 値
内発的-外発的 動機づけ	年数間					418.164	3	139.388	3.857***
	年数内					10408.919	288	36.142	
	合 計					10827.082	291		
認知された 因果律の所在	年数間					34.411	3	11.47	4.902***
	年数内					673.931	288	2.34	
	合 計					708.342	291		
内生的- 外生的帰属	年数間					29.267	3	9.756	4.756***
	年数内					590.798	288	2.051	
	合 計					620.065	291		
楽しさ	年数間	11.623	3	3.874	2.246*				
	年数内	438.501	149	2.943					
	合 計	464.842	151						

\* :  $p < .10$ , \*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$

自分の学習行動を自分で引き起こしていると認知していることであり、また内生的-外生的帰属は自分の学習行動に対して、その学習行動それ自体が目的であると考えていることになる。自らの学習を自らが決定して行っていることは自己決定感が有意に高いことと整合的である。また、学習そのものを目的としているということは、部活動に所属し続けることで、所属部活動のスキルを向上させることそのものを目的として行っていると考えられる。なにか別の目的があり部活動を長期間継続しているとは考えづらい。したがって、短期間の部活動経験者と学習面でも差が生じてきているのであろう。

主観的幸福感について、前期では有意な差がまったくなかったが、後期には多くの尺度・因子に有意な差が見られた。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ、「主観的幸福感：0 - 3年 < 7 - 9年, 10年以上\*\*\*; 4 - 6年 < 7 - 9年, 10年以上<sup>†</sup>」, 「自信：0 - 3年 < 7 - 9年, 10年以上<sup>†</sup>; 4 -



表 12 部活動の経験年数により差のあった尺度・因子(3)

従属変数	変動因	前 期				後 期			
		平方和	df	平均平方	F 値	平方和	df	平均平方	F 値
主観的幸福感	年数間					1181.779	3	393.926	6.94 <sup>†</sup>
	年数内					16347.985	288	56.764	
	合 計					17529.764	291		
自 信	年数間					131.017	3	43.672	11.432 <sup>†</sup>
	年数内					1100.23	288	3.82	
	合 計					1231.247	291		
達成感	年数間					30.228	3	10.076	2.782**
	年数内					1043.019	288	3.622	
	合 計					1073.247	291		
失望感	年数間					51.962	3	17.321	4.397***
	年数内					1134.545	288	3.939	
	合 計					1186.507	291		
至福感	年数間					68.304	3	22.768	6.746 <sup>†</sup>
	年数内					972.008	288	3.375	
	合 計					1040.312	291		

\* :  $p < .10$ , \*\* :  $p < .05$ , \*\*\* :  $p < .01$ , † :  $p < .001$

6年<7-9年<sup>†</sup>, 10年以上\*\*\*], 「達成感: 4-6年<10年以上\*], 「失望感: 0-3年<7-9年\*\*\*, 10年以上\*; 4-6年<7-9年\*], そして「至福感: 0-3年<10年以上\*\*; 4-6年<10年以上<sup>†</sup>」に有意な差が観察された<sup>12)</sup>新型コロナウイルスによる強制的な自粛生活は、我々に過度の心的負担・ストレスを与えてきた。部活動経験を経て、忍耐力やストレス耐性が身につく(上野(2007), 今宿他(2019)), 心理的健康も長期間維持できるということかもしれない。特に、自信は自分のやってきたことに幸せを感じたり、危機的な状況に出会っても立ち向かっていけるという尺度、絶望感は今後に対す

12) 絶望感は逆転項目となっているため、他者依存と同様に平均が高い人ほど絶望感を持ちにくく、平均点が低い人ほど絶望感を持ちやすいことになる。

る不安が小さかったり、自分の人生が面白いと感じている尺度、そして至福感  
は自分は周りに欠かせない人間であり、強く幸福感を感じる瞬間があることを  
意味する。部活動を長く続けてきた学生はこういった能力をコロナ禍でも維持  
することができる能力を身に付けていると考えられる。

## 5 お わ り に

新型コロナウイルスは、世界の社会経済に大きな影響を与えた。大学などの  
教育の場に目を向けると、4月から休校期間が続いたり、対面授業が禁止され  
遠隔授業が続き不慣れな授業形態で受講せざるを得ない期間が続いたり、日  
常生活のみならず学習に関わる環境までも一変した。教員は遠隔授業の準備に  
追われ、感染対策に神経を使い、新型コロナウイルスにより大きな負荷を強い  
られた。何より、教育を受ける学生や生徒はそれ以上の負担感を覚え、スト  
レスを抱え込んだだろう。本論文では、このような状況の中、学生の学習に向  
かう態度や主観的な心の健康をどう捉えているのかを分析した。

全体傾向を把握した上で、学生の属性に応じて、どのような特徴があるのか  
を明らかにした。性差や学年差、部活動経験差については、後期にその差が顕  
著に現れた。もともとの特性や、それまでの経験が大きく影響していると考え  
られる。一方で、大学志望順位による差は後期になると縮小したが、学習意欲  
については、有意な差が見られる項目が増えた。松山大学進学に対する志望順  
位の低い学生は不本意入学者とも考えられるが、新型コロナウイルスによる閉  
塞感が続く中、学習意欲は衰えていないという前向きな結果が見られた。

本論文では、学生の属性ごとに各尺度・因子に有意な差があるかどうかのみ  
を検討してきた。しかしながら、学生全体をクラスター分析し、各クラスにお  
ける特徴や、各尺度・因子の値が高い群と低い群に分けた場合、属性ごとにど  
んな特徴があるのか、あるいは演習系の学生と講義の受講者と差があるかなど、  
まだまだ網羅的な分析はできていない。これらの点は今後の課題である。

## 参 考 文 献

- Deci, E. and R. Ryan (1985) *Intrinsic Motivation and Self-determination in Human Behavior*: Plenum Publishing Co.
- 飯田俊二・井上哲 (2021) 「新型コロナウイルス感染症が学生生活に及ぼした影響：北海道大学歯学部6年生へのアンケート調査」, 『北海道歯学雑誌』, 第42巻, 44-51頁.
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康史 (2003) 「主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」, 『心理学研究』, 第74巻, 276-281頁.
- 今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規 (2019) 「学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題」, 『体育学研究』, 第64巻, 1-20頁.
- 上野耕平 (2006) 「運動部活動への参加による目標設定スキルの獲得と時間的展望の関係」, 『体育学研究』, 第51巻, 49-60頁.
- (2007) 「運動部活動への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得」, 『体育学研究』, 第52巻, 49-60頁.
- 上野耕平・中込四郎 (1998) 「運動部活動への参加を通じたライフスキル獲得に関する研究」, 『体育学研究』, 第43巻, 33-42頁.
- 大西良 (2022) 「コロナ禍における子どものQOL～実態調査の結果を中心に～」, 『筑紫女学園大学紀要』, 第17巻, 87-96頁.
- 葛西真記子・澁江裕子・宮本友弘・松田保 (2010) 「スポーツ活動経験とレジリエンスの関連－時間的展望, 身体的自己知覚の視点から－」, 『教育実践学論集』, 第11巻, 39-50頁.
- 葛城浩一 (2021) 「コロナ禍における学生の学習活動及び教員の教育活動の実態」, 『香川大学教育研究』, 第18巻, 77-90頁.
- 桜井茂男 (1993) 「自己決定とコンピテンスに関する大学生用尺度の試み」, 『奈良教育大学教育研究所紀要』, 第29巻, 203-208頁.
- (1997) 『学習意欲の心理学』, 誠信書房.
- 桜井茂男・高野清純 (1985) 「内発的－外発的動機づけ測定尺度の開発」, 『筑波大学心理学研究』, 第7巻, 43-54頁.
- 杉山映里香・菅千索 (2010) 「学習活動における内発的動機づけと自己認知との関係について」, 『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要』, 第20巻, 57-64頁.
- 鈴木久米男・菊池洋 (2021) 「新型コロナウイルス感染症の影響下におけるA大学の対応及び学生の現状と課題」, 『岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要』, 第1巻, 45-60頁.
- 園部豊・續木智彦・西條修光 (2012) 「大学入学時における過去の運動・スポーツ経験が首尾一貫感覚(SOC)および健康度に及ぼす影響」, 『学校保健研究』, 第53巻, 527-532頁.
- 竹内由美 (2010) 「大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係」, 『心理相談センター年報』, 第6巻, 15-22頁.
- 内閣府 (2020年12月24日) 「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動

- の変化に関する調査], well-being に関する取り組み (閲覧日: 2022年2月21日).
- (2020年6月21日)「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査], well-being に関する取り組み (閲覧日: 2022年2月21日).
- (2021年6月4日)「新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査], well-being に関する取り組み (閲覧日: 2022年2月21日).
- 葉山大地・植村みゆき・萩原俊彦・大内晶子・及川千都子・鈴木高志・倉住友恵・櫻井茂男  
(2008)「共感性プロセス尺度作成の試み」, 『筑波大学心理学研究』, 第36巻, 39-48頁.
- 桃木芳枝・中谷素之 (2016)「共感-システム化を媒介とした性役割意識のメンタルヘルスへの影響」, 『パーソナリティ研究』, 第25巻, 101-111頁.
- タネン・デボラ (1992)『わかりあえない理由-男と女が傷つけあわないための口のきき方10章』, 田丸美寿々訳, 講談社.